

令和7年度第1回北海道立近代美術館協議会 議事録

1 日 時

令和7年（2025年）8月5日（火）13:30～15:50

2 会 場

北海道立近代美術館 3階 会議室 （Web会議システム（Zoom）併用）

3 出席者

(1) 委 員

大石朋生（Web会議システムによる出席）、北村清彦、木村寿賀子、霜村紀子、千葉徹、中井令、野尻敦子、長谷川宏美、藤島尚子、三橋純予（Web会議システムによる出席）、吉崎元章（計11名）（欠席：堀口基一）（敬称略50音順）

(2) 事務局

ア 近代美術館

立川館長、菅野副館長、村山学芸副館長、熊澤総務企画部長、佐藤学芸部長、青山総務企画課長

イ 三岸好太郎美術館

櫻井館長、本吉副館長

ウ 教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課

浅野道立近代美術館担当課長、富田課長補佐（道立近代美術館整備係）

4 傍聴者

なし

5 議 題

(1) 会長・副会長の選出

(2) 近代美術館

ア 令和6年度事業実施報告及び美術館評価について …… 資料1-1

イ 令和7年度運営計画について …… 資料1-2

ウ 北海道立近代美術館リニューアルに向けた検討状況について …… 資料2

(3) 三岸好太郎美術館

ア 令和6年度事業実施報告及び美術館評価について …… 資料3-1

イ 令和7年度運営計画について …… 資料3-2

6 議 事

立川館長挨拶及び委員・職員紹介の後、事務局の進行により議事に入る。

(1) 会長・副会長の選出

委員の互選により、北村委員を会長に、吉崎委員を副会長に選出した。

この後の議事は、北村会長が進行した。

(2) 近代美術館

ア 令和6年度事業実施報告及び美術館評価について

イ 令和7年度運営計画について

(ア) 事務局から資料1-1及び資料1-2について説明

(イ) 質疑・意見

【吉崎副会長】

詳しい御説明、また、事前に詳しい報告書も送っていただいて、同業者として大変興味深く、じっくりと読ませていただきました。

意見が二つ、質問が二つあります。

意見の一つ目は、今実施している展覧会、特に展示室Aで実施している「美術は何を記憶しているか」という1945年から振り返った展覧会と、「この1点を見てほしい」という本郷新の「嵐の中の母子像」の紹介、これはすごく良いと思いました。

若い学芸員が担当したと聞きましたが、美術館というのは、なかなか観ることができない海外の作品や日本の古い時代の作品を紹介するのも大切である一方、やはり、地元の美術を美術館なりにしっかり調査研究し、観せていくというのがとても大切なことであり、それをしっかりとされていると感じました。僕も、ある程度知っているつもりではいたのですが、改めて調べ直しをされ、若い感性でまとめ上げられていて、ものすごく新鮮に観ることができました。去年の「星の瞬間展」もそうだったのですが、今後も、北海道の美術について、現代的な視点から新しい価値を見つけていくようなことを、ぜひ続けてほしいと改めて思いました。

本郷新の「嵐の中の母子像」の解説に関しては、作品の元になったポスターを新発見して、今回紹介してくれているという、我々としても本当にありがたい研究でした。

それから、もう一つの意見ですが、予算を見ると、作品の修復費として500万円ほど措置されていて、とても良いことだと思いました。ただ、特別緊急と付いているので、今後は、常時措置されるような形で進めていただければと思います。

やはり美術館にとって、作品をしっかりと保管して伝えていくことは大切だと思いますので、意見として述べさせていただきます。

次に質問です。美術館評価を見て、とても良い活動をしていると思いつつも、ほとんどがB評価となっています。評価基準の資料も見せていただきましたが、やや高い目標値を設定し、現状に甘んじることなく、より良い活動を目指していく姿勢の現れだと理解しています。

評価に関して、特に目標値と乖離していたのが、観覧者に対する児童生徒の割合、アートレファレンスサービス・図書コーナーの利用件数、ホームページアクセス件

数、そして、キャンパスパートナーシップのメンバー数で、これらが評価を下げている要因と思うのですが、例えば、「学習の場と情報提供の充実」で言えば、展覧会関係の講習会やギャラリートークをたくさん実施しているというイメージがあるにもかかわらず、C評価になっているというのは、正直、意外に思いました。今年度、少し目標値が変わっているところもあると思いますが、目標値については、どのように設定し、どのように見直しをされているのかというのを聞きたいというのが、一つ目の質問です。

二つ目の質問は、ポケット学芸員です。とても良い取組だと思うのですが、どれくらい見られたかという件数は、分からないものなのでしょうか。

また、恐らく、多言語化もできると思うのですが、そのような取組をされているのかということもお聞きしたいです。

【佐藤学芸部長】

ポケット学芸員についてですが、実際どれくらい見られているかというのは、正確には把握できていません。また、多言語化については、すぐに取りかかろうというところまでには至っていないですが、リニューアルを見据え、話題には上がっています。

【熊澤総務企画部長】

評価に関してですが、御指摘のとおり、A R S コーナーの利用件数やホームページのアクセス件数といったところは、目標値が高めに設定されており、昨年度の数値を上回っていても、目標値がそれよりも高いため、達成できていないという結果になっています。

目標値については、毎年検討して設定していますが、必ずしも、過去の最高値を目標値として設定しなければならないということではありませんので、今年度については、例えば、過去の平均値を目標値とするような見直しも行っているところです。

【吉崎副会長】

ありがとうございます。

【北村会長】

木村委員に伺いたいのですが、A R S コーナーに関しては、美術館協力会に御協力いただいていると思います。普段、どのように利用されているのでしょうか。

【木村委員】

A R S コーナーは、開設以来のコーナーだと思うのですが、私も一度も使ったことがありません。通りかかって利用者が非常に少なくて、果たして、どれくらい機能しているのかなという印象は持っていました。

【北村会長】

図書が置いてあり、展覧会の情報もあって、そこに人がいて、お尋ねがあれば、調べてくれるようなコーナーだと思うのですが、そのようなコーナーがあるということが、あまり周知されていないのかなと思います。このような情報のレファレンスサービスを行っているということについて、もう少し知ってもらうことが大切かなと思います。

【木村委員】

A R S コーナーにいる人は、資料を集めるなど、一生懸命に取り組んでいると思いますが、実際にはスルーされていることが多いのだろーうと思います。プロの意識を持っているような方が、もう少し調べたいというようなときには、利用してくれているのだろーうと思いますが、現実として、利用者は少ないという感じがします。

【北村会長】

ロッカーと売店の中間にあって、トイレに行くための通路になっているような感じもありますので、もう少しPRして、こういうサービスをしていますよということができれば良いのかなと思います。

【三橋委員】

とても努力をされ、アイディアを出しながら、多岐に渡る活動をされているというのは、いつも本当にすごいと思っており、今回の報告も、そのように思いながら聞いていました。

大学で、リニューアルや展覧会に関連する授業をしながら、見学の課題などを出すのですが、学生の反応を見ると、岩見沢・札幌間の往復交通費と観覧に回るだけで5,000円から6,000円くらいかかるので、経済的に苦しい学生から、課題ができないという相談も増えてきていて、私の研究費で、まとめてバスで連れていく方が良いのかなといったことも検討しているところです。

また、このところ、日本画やガラスなど、絵画だけではない展示も結構ありますが、例えば、入試の傾向、また、研究室の分属のときもそうですが、日本画や工芸など、美術館でいろいろな展示を観てきた学生というのは、結構、広く知識があるなと感じたりもします。やはり、小さい頃から、いろいろな分野の作品やメディアなどに触れられると、その子の関心が広がるのかなと思っています。

例えば、旭川だと、木工を身近にして育ってきたから、木工をやりたいという学生も多いですし、やはり、基幹となる美術館の企画というものは、子供たち、美術をやっていききたいという若い人たちに大きな影響があるのだなと日々実感しているところです。近代美術館の多彩なラインナップは、とても良いと思っています。

【北村会長】

大学との連携ということでは、キャンパスパートナーシップというのがあったと思うのですが、今は、どうなっているのでしょうか。

【三橋委員】

今、割引などの優遇措置は、なくなっていると思います。

【佐藤学芸部長】

キャンパスパートナーシップは、元々、大学が常設展のチケットを御購入くださることで、学生さんが常設展を無料で観ることができるというシステムだったのですが、今では、大学側から購入を遠慮したいという話を受けています。

【北村会長】

私も、大学を退職するまで連携事業をさせてもらっていましたが、大学も含め、いろいろな機関との連携が深まるような工夫というのが必要なのかなと感じています。

【霜村委員】

今回、「金閣・銀閣 相国寺展」を観て、国宝や重要文化財、教科書に出てくるような作家の作品を北海道で観られる機会というのは、とても大切で、素晴らしいなと思いました。ただ、先ほど、吉崎さんがおっしゃっていたことと重なりますが、その後に観せていただいた今回の常設展、こちらが、ものすごく素晴らしかったです。

戦後80年の美術の動向やその歴史、地域で確実に活躍してきた作家という各テーマを切り取り、しかも、収蔵品から、普段は埋もれがちな作家の作品をうまく1点取り上げる形で構成されていて、学芸員の方が、収蔵品約6,000点をいかに研究されているかが伝わってきましたし、このタイミングに合わせてこの作品を取り上げる、また、各地域を網羅して紹介するといった構成も素晴らしかったです。

昨年の「星の瞬間展」もそうでしたが、全国で有名な作品を見た後に、収蔵品を知り尽くした学芸員さんだからこそできる企画、こういった展示を観ていただくと、地域で収蔵することの大切さも分かりますので、もっと取り上げられていいのではないかと思います。

あわせて、ボランティアの方と学芸員さんが、それぞれ作品の解説をされているのですが、かなり多くの回数が開催されています。これは、教育普及活動ではなく、別の活動として記載されているのかもしれないのですが、確実に作品を紹介していく試み、来館者に直接、研究成果を紹介するという試みを積極的にされているということについて、もっとPRし、発信しても良いのではないかと考えていました。

また、先ほど話題になったARSコーナーは、私はたまに覗くのですが、今回の展覧会の関連作家や地元の作家の関連ミニテーマ展とか、図書館でよく行っている

テーマ展のような形でA R S担当の方が企画し、それを積極的に発信して「休憩されるならA R Sで。」というような形で宣伝していくと、皆さんにその存在を知っていただけるのかなと思いました。

あと、数年前、特別展の予算が非常に少額だということを聞かせていただきましたが、そのような中で、1,000万円程度ですけど、独自の展覧会をととても工夫して行っていると思いました。

大規模な展示を独自で企画して準備すると、本当に何千万円もかかると思うのですが、そういうことを別予算でできるような仕組みがあるのであれば、教えていただければと思います。

【北村会長】

限られた予算の中で、ということになるのだと思いますが、実行委員会展が一つだったのが、今年度は貸館展が二つということで、負担金が半分で貸館料が増える分、修復の方にお金が回るという、ものすごいやり繰りをしているんだなというところが見て取れます。もう少し余裕のある予算が組めれば良いと思うのですが、なかなかそういうご時世でもないのかもしれないかもしれません。

実行委員会の負担金については、先ほども説明があったように、赤字にはならないが、黒字にもならないという形で、リニューアルに向けて、在り方の議論がなされていますけども、リニューアルを待たなくても、なるべく早い時期から、実行委員会の内部で仕組みの変更なども議論して、少しでも館の収入になるような形になれば良いとは思いますが。

【立川館長】

リニューアルを待っているわけではないのですが、相手方からの提案を受け付ける段階で、実行委員会の在り方そのものを変えておかなければならないということがあるので、事実上、リニューアル後になろうかなと思います。

先ほどの説明にもありましたが、実行委員会の負担割合を変えていけば、軽く2,000万円くらいの収入になって、今の倍くらいの展覧会経費を確保できると思いますので、早く導入したいとは思っています。

【中井委員】

特別展も常設展も、どちらも拝見させていただきましたが、毎回、本当に素晴らしくて、楽しくて、しっかり観てしまうと、気付いたら1時間半とか2時間くらい、いてしまうんですね。だから、両方を観ることがなかなかできなくて、日を改めてまた観るという感じになってしまうのですが、本当に、毎回、楽しい展覧会をありがとうございますという思いです。

「歌川国芳展」に関しては、天王洲アイルの「動き出す浮世絵展」なども観てき

て、向こうは本当に全部デジタルで、映像がメインでしたが、こちらの方は、原画もたくさん来ていて、それをじっくり見ることができたのが、すごく楽しかったですし、良かったと思っています。レーザーの再現もあって、一般の方、普通の方だと、そのような没入型のものを目玉だと思う方が多いのかもしれないですし、客寄せということでは、そちらの方が分かりやすいのかもしれないのですが、やはり、こういった原画ありきだということを分らせてくれる展覧会になっていて、良かったと思います。

「金閣・銀閣 相国寺展」も、初日に拝見させていただきましたが、本当に素晴らしいくて、1点1点見入ってしまいました。後期も、楽しみにしています。

それから、皆さんもおっしゃっていましたが、今開催している常設展も、本当に見応えがありました。特別展でスポンサーが付いていると、どうしてもテレビCMなどで目にする機会も多いので、お客さんは、そちらを目玉だと思って観に行ってしまうと思うのですが、常設展の方も本当に見応えがあって、何回でも足を運んでみたいという展覧会になっていると思います。毎回見るたびに、飽きさせないようになっていることに感心しました。

今、実施している「ウィズ・キッズ」で、杉山留美子さんの部屋もありますが、キッズではなく大人が読んでみても、新しい発見があるようなクイズになっていると思います。例えば、青色の薄いところと濃いところがあるというのは、あのようを書いてくれないと、気付かずに次に行ってしまう方もいらっしゃると思いますし、他にも、白しかないように見えるけれども、他の色もあるよねというような、大人に対しても脳裏に訴えかける、気付きを与えるようなクイズを作っていて、そこが学芸員さん、素晴らしいなと思いました。

洞爺湖のコレクションも本当に良かったですし、青木実歌さんの作品も、本当に素晴らしいですね。これは、本当にたくさんの人に見ていただきたいなと思っていて、通年展示をしていただいて良かったと思います。

それと、ARSコーナーですね。私も少し気になっていることとして、たくさんの書籍があるのですが、滞在したいと思うような感じになっていないというか、普通の人が「ここを利用して良いのだろうか。」と思ってしまうというか、ちょっと敷居が高く、専門の人しか使ってはいけないのかなという感じを与えてしまっているのかなと思います。もう少し、ゆったり落ち着いて、図書館感覚で利用できるようになっていると良いのかなと思いました。もし、そうだとすれば、例えば、2階にある、みんなが自由に利用できる休憩コーナーくらいの広いところにたくさんの書籍があったりすると、もう少し手に取って見たりして、いろいろな作家、いろいろな美術に関心を持っていただけるきっかけになるのではないかなと思いました。

それから、ポケット学芸員ですが、少しずつ作品が増えてきているなと思います。
音声も聴かせていただきましたが、すごく聴きやすく、放送局の生徒さんたち、素晴らしいと思いました。ただ、ポケット学芸員は、恐らく、美術館に来て使うという前提で音声を入れているのかと思うのですが、ボリュームを最大にしても、全然音が大きくなりませんよね。例えば、私もそうなのですが、自宅やカフェなどの落ち着いたところで「美術館にこんなコレクションがあるんだ。」というような利用の仕方をするということもあると思うので、普通のボリュームでも聴けるようになると、ありがたいなというふうに思いました。

【北村会長】

ポケット学芸員の仕様というのは、そういうものなののでしょうか。

【中井委員】

他の美術館のものを利用しても、全部音が小さいです。

【北村会長】

美術館外で利用するものではないということなののでしょうか。

【中井委員】

テキストも表示されるので、そのような使い方をするのであれば、テキストを見れば良いということなのかなとは思いますが。

【北村会長】

作品の画像は、データベースで、ある程度観ることができると思いますが、それに付随して解説を読むこともできるといったようなことも、考えてみてもらえたら良いのかなと思います。

【千葉委員】

令和7年度運営計画で、貸館料収入が500万円近く増えていますが、これは、貸館展の中身によって収入が変わったということなののでしょうか。それとも、何か他の要因もあるのでしょうか。

【熊澤総務企画部長】

貸館の歳入が500万円ほど増になっているのは、今年度、貸館展が1本増えたことによるものです。昨年度は1本でしたが、今年度は2本ということで、1本増えた分、展示室Bの使用料収入が増えるということです。

【千葉委員】

今回は、その増えた分を美術品の修復事業に充てたということでしょうか。

【熊澤総務企画部長】

そうですね。

【千葉委員】

あと、今、実施されている展覧会についてですが、恐らく、観に来られる多くの方は、特別展を観に来ているんだろうと思いますし、私も、特別展の後に「美術館は何を記憶しているか」を観たのですが、印象に残ったのは、そちらの方だったんですよ。私も、自分でも驚いたのですが、1945年からの戦後の歴史を、うまく、分かりやすく紹介している美術館の方々の努力、そして、学芸の皆さんが、観ているお客様に話し掛けて説明されているのが、非常に印象に残りました。そこは、非常に素晴らしかったと考えています。

【北村会長】

常設展が絶賛されていますね。私も観ましたが、盛りだくさんで、本当に、多くの人に観てもらいたいと思います。

【藤島委員】

美術館というのは、行った経験がある人は、どんどん行って、どんどん好きになって、楽しめるのですが、行ったことのない人には全く縁がないというところがあるので、最初の一步をどのようにしていくのかというのが、非常に大事だと思います。学校で、美術館に生徒を連れて来ても、「連れて来られた。」という感じで終わってしまうので、いかにして「行ってみたい。」と思わせるかというのが大事で、それが一つのきっかけになるのかなと思っています。

今、学校では、体験学習であるとか、「個人テーマで探求してみよう。」といった取組を非常に多く行っていますので、そういうところに絡めて、自分なりの関心を持って美術館に行くというような感じで、高校生が美術館を体験として味わったら、一生、美術館と親しんでいける人生を歩んでいけるのかなと思います。

質問ですが、常設展は、中学生以下無料となっていますが、高校生はどうなのでしょう。

【佐藤学芸部長】

夏休み期間中は、高校生も無料となっています。

【藤島委員】

それをもっとアピールしていただければと思います。

【菅野副館長】

学校には、担当課から「周知をお願いします。」ということで通知させていただいて、館内にポスターを貼ったり、チラシを置くなどの工夫もしているのですが、まだまだ足りない部分もあるかもしれません。期間が終わるまで、まだ1か月ありますので、考えていきたいと思います。

【北村会長】

美術館の敷居というのは、以前よりも随分低くなっていて、美の殿堂という形で

はなくなってきてはいるのですが、それでもまだ、特に、若い方が足を運ぶ機会がないので、「ウィズ・キッズ」のような、子供が親を連れてくるというような試み、児童生徒に注目した試みというのを少しずつ始めているところだと思います。初めの一步をどう作るかというのは、大きな課題だと思います。

【野尻委員】

P T Aの立場で言わせていただくと、やはり、子供たちに本物を観てもらいたいという気持ちがあります。今年の春まで札幌国際情報高校のP T A会長で、今は顧問をしているのですが、美術部の子はとても興味があるようで、休みのときに、先生と一緒に来ていたりしているようですし、芸術の森などにも行っていると思います。もちろん、そのときに展示している作品によって、興味がある、興味がないということもあると思うのですが、興味を持ってほしいと思いますし、子供たちには、たくさん本物を観てもらいたいので、もっと周知していただければと思います。

あと、たまたま、昨日、高校の個人懇談に行ったら、「金閣・銀閣 相国寺展」のポスターが貼ってありました。ただ、夏休みに、高校生は常設展無料というのは知らなかったですね。

【北村会長】

広報の問題というのは、やはり一朝一夕にはいかないもので、紙媒体だけではなく、SNSなど、いろいろなチャンネルがあると思うのですが、情報をほしいと思っている人に、ほしい情報がなかなか届かないっていうのは、何事につけても、もどかしいところです。

【木村委員】

皆さんのお話を聞いて、非常に勉強になったということと、やはり、ARSについては、解説の方が担当していますが、原点に立ち返って、もう少し深く掘り下げていった方が良いのかなと思いました。

あと、美術館協力会の行事で、国内と海外の美術館巡りというのを実施しており、私も何回か参加しているのですが、参加した方の話を聞くと、やはり、美術館の敷居は高いという声が多いです。そうは言っても、旅行には普通に来るというような感じなのですが。

では、どのようなところに敷居の高さを感じるのかとなると、それが明確な言葉としては、なかなか出てこないというところですが、やはり、敷居が高いという感覚は持っているようです。

【長谷川委員】

私は、一般人の代表だと思って来ているので、一般人の目から話をさせていただければと思います。

先ほどから、プロの皆さんたちが、最近のコレクション展はすごいという話をされていますが、私もそう思っています。「星の瞬間展」の頃からですが、特別展の後だと時間が足りなくて、2階のガラス展に辿り着かなかったですし、前回の常設展も同じで、特別展の後に観たら、そこまでの体力がもう残っていなかったです。

ものすごくボリュームがある中で、こんなに素敵なコレクションをぶつけてくるというのは、皆さんに「お客さんたちが常設展にも流れてくれば良いな。」というお考えがあるからなのかなとは思いますが。確かに、来館者のほとんどは、1日空けて、美術館に行きましょうという勢いで来るのですが、余りにもボリュームが多すぎるので、「常設展は、毎回観られるよね。それなら、まあいいか。」となってしまうところがあるのではないかという気がします。入ってみたら、ものすごくボリュームが多くて、もちろん、どちらがどちらに比べて多いということではなくて、同じぐらい、私の印象としては、多かったと思っています。だから、私も、今回は朝から時間を空けて、体力をつけて、先週、特別展と常設展を掛け持ちで観たのですが、一般の人で、特別展を観た後、日を改めて常設展に行くという人は、多分ほとんどいないだろうなと思います。

「多くのお客さんが来るときにぶつけたら良い。」というお考えも、とてもよく分かるのですが、これだけすごいものを作っているのに、なかなか観てもらえない、きちんと観てもらえないというのは、とてももったいないことだと思いますので、そこをどうしたらいいのかというのは、私も含めて、これから考えていかなければならないと思っています。それくらい、最近のコレクション展は素晴らしいと思います。もちろん、「最近の」というのは、それ以前のものがどうということではなく、私の関心が急にそこに向いたからだと思うのですが、すごくボリュームがあって、みんなに知ってもらいたいし、観てもらいたいと思っています。

それから、ARSコーナーに関連して気付いたことですが、特別展の出口付近に本棚がありますよね。あの本棚は、冊数は少ないですし、椅子の数も少ないかもしれませんが、照明が当たっていて、本を眺めたり、立ち読みをしたりしている人がいます。去年まで、私は、そこに本が並んでいることに気付いていませんでしたが、本を眺めている人がいたり、座って、とても呑気に読んでいたりする人が一人いるだけで、「ここに本があるんだ。どんなものがあるんだろう。」といった感じで、それに釣られる人も必ずいて、企画に合わせたタイムリーな本が、少ない数で手に入りやすくなっているので、興味のある人は、見ていくんですよね。最近、椅子も置いてありますし。あそこは、道立図書館のチョイスによるものだと思うのですが、とても見やすく、すごく良いと思います。

そうした点で言うと、ARSコーナーは、すごく場所も良くて、本も多いけれど

も、逆に言えば、本が多すぎる。そして、無人ではないので、何か言われるのかなと思う部分があって、非常に入りにくいということがあります。先ほど、中井委員もおっしゃっていましたが、何を探しているか、何を知りたいかが明確な人以外は、入ってはいけないというような印象があるのではないかと思います。

でも、特別展の出口にある本棚は、ふらっと立ち寄って、目についた本を開いて、「この本は貸してもらえないんだ。それなら、どこかで借りよう。買おう。」といったことにつながっていくのだろうと思うんですね。だから、無人という点は、ポイントが高いのかもしれないです。多分、あの本棚の利用者数は、把握していないのだろうと思いますが、たまに来ると必ず人がいますし、こちらの方が、手に取られている率が高いのかなと思っています。

あと、どのようにして来館者を増やしていくかというお話がありました。お話を聞いていると、美術館を好きだという人に、どのようにして繰り返し来てもらうか、もっと言えば、展覧会が変わるごとに、どのようにして来てもらうかというお話をされているのかなと思います。それから、今、少子化が話題になっていますが、子供というのは、未来のお客さん、未来のリピーターになるわけで、少ない子供をどのように獲得していくのか、そして、いかに美術と向き合ってもらおうかという話をされていると思います。リピーターを増やすことも、確かに大切ですが、新たな来館者を増やすことも同じくらい大切だと思います。

そこで、そもそも、美術館とはどのような場なのかということで、先ほど、敷居が高いとおっしゃっていましたが、そのとおりで、敷居は確かに高いのですが、本来、美術館とはどうあるべきかを考えると、ホームページの「私たちが目指すこと」に「誰もが」や「多様な人々」と記載されているように、全ての人に開かれている、誰でも来られる、そういうことを前面に打ち出していかなければならないと思います。

しかも、近美の敷居が高いというのは、美術館だから敷居が高いのではなくて、名前が北海道立近代美術館であるために、北海道の代表になってしまっているところがあると思います。他の道立美術館は、函館美術館や帯広美術館のように地名が入っていますが、近美に地名は入っていません。そういうこともあって、北海道の中でも一番の美術館でなければならないのではないかと思います。遠方から来る人たちは、道立近代美術館というと、北海道を代表する美術館だと思っている。それは、収蔵のことなのか、面積のことなのか、何をもってなのかは分かりませんが、そう思っている。そのような中で、本来、一番でなければならないのは、先ほども言いましたが、誰にでも開かれている、どなたでも来られるところだと思います。

ただ、今、そこがどうなのかと考えたときに、そうではないんだと感じます。

新しくできた美術館であれば、いろいろな情報を吸収して、そういうことに優しい美術館にできるのですが、近美は、長い歴史があって、もっと今風にならなくていいかならなかつたところが、それほど変わってないのではないかということです。

例えば、バリアフリーであれば、国を挙げて変わってきたので、段差がない、点字ブロックがあるといったことは、もう既にできていると感じます。しかし、建物の設備などのハード面は足りていても、ソフト面はどうでしょう。

時代に則して言えば、ソーシャルストーリーというのが、ブームになってきていると思います。発達障がいのあるお子様、その親御さんに向けて、初めて美術館に行くにはというような案内が書かれているものです。初めて美術館に行く方は、今は、ホームページやSNSをまず見ます。ソーシャルストーリーは、発達障がいのある方のために作られたもののようですが、発達障がいのある方に限らず、お子様連れの方や目の見えない方、車椅子の方などの多様な方々に活用できる内容だと思います。ソーシャルストーリーをうまく活用すれば、もっと道民全ての方に開かれた美術館であることをアピールでき、新たな来館者が増えるかもしれません。ですから、ソーシャルストーリーのようなものを作り、ホームページに載せ、SNSで拡散し、必要なところに冊子を配布するなど、積極的な広報が必要だと思います。

近美は、観光スポットの一つに入っているもので、海外の観光客の方がとても多くて、ある意味、海外の方には開かれていると思うんです。あとは、もう少し、道民に向けて開いていっても良いのではないかと思います。そのようなことは、リニューアルに向けてというところもあるのだらうと思いますが、リニューアルに合わせなくても、随時、更新しても良いのかなと思っています。

【北村会長】

リニューアルに向けて、美術館が開かれているということについては、今おっしゃった障がい者の問題なども含めて検討されていますが、リニューアルを待たずとも、あるべき美術館の姿に、少しずつ近づけていければ良いのかなと思います。

敷居が高いということですが、比喩ではなく、物理的に敷居を低くしてしまえば良いということもあろうかと思います。例えば、特別展について言えば、とても良い展覧会ですが、正面にバーツと白い壁が立っていると、そこで拒まれているような印象になってしまう気がします。ポンと壁があると、そこで行き止まりになってしまうような感じもするので、例えば、無料で誰でも観ることができる作品を一つ置いて、そこを呼び水にして人が流れ込む形にするといったような展示の在り方についても、考えることができるのかなと思いました。

【大石委員】

先日、青森県立美術館に行ったのですが、入口のところにシャガールの大きい作品が4枚あって、空間の抜けがすごく広く使われていました。おっしゃるとおり、壁があると物理的に敷居が高いというのは、とてもよく分かる話で、近代美術館にも広い吹抜けがありますので、できるか、できないかはともかく、そこにガンと明るい状態があると、入ってからの気持ちが変わるのかなと思いました。

最近、伊藤若冲などを毎年観ることができて、僕としてはとても嬉しいのですが、やはり、近代美術館の本丸というのは、ガラスだろうと思っています。青木実歌さんの作品の収蔵であったり、イワタルリさんの展覧会であったりというのは、楽しみにしていた方がすごく多いと思います。やはり、近代美術館といえばガラス、ここに行けば美しいガラスが必ず観られるというようなファンもいると思いますので、継続的に進めていただけたら良いのではないかなと思った次第です。

【北村会長】

照明の当て方だけでも、人の流れというのは変わるのかなと思いますので、考えてみてください。

ウ 北海道立近代美術館リニューアルに向けた検討状況について

(ア) 事務局から資料2について説明

(イ) 質疑・意見

【北村会長】

昨年度までで、基本構想という形でまとめられ、今年度から、具体的に諸室をどうするかといった、具体的な設計も含めた基本計画を立てている段階です。

この協議会は、年に2回ほどですが、リニューアルについて議論している「これからの北海道近代美術館検討会議」の方は、かなり話が加速していますので、どうしてもタイムラグがあります。先ほど、開かれた美術館であるとか、バリアフリーや障がい者の問題といったような発言もありましたけれども、僕は、代表者ではないのですが、検討会議の委員でもありますので、何か御意見があれば、それを検討会議にもできるだけ伝えたいと思います。「このようなことを基本計画の中で考えてほしい。」というようなことがあれば、皆さんから御意見を伺いたいです。

検討会議の方は、どんどん議論が進んでいますので、協議会の方が遅れるというか、なかなか間に合わないことがあるので、何か御意見があれば、随時、美術館に伝えてもらい、それを私にフィードバックしてもらえれば、伝える機会がありますので、なるべく皆さんの広い御意見を伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。

こういう美術館であってほしい、こんなことを実現してほしいといったこと、また、浅野道立近代美術館担当課長もいらっしゃっているので、「これは、どうなっているんだ。」ということでも構いませんので、御意見を賜りたいと思います。

【藤島委員】

私は美術館が好きで、各地に旅行に行ったときに美術館にも行くのですが、今は、グッズショップが結構充実しているところがあります。グッズを充実させたり、特別な店舗を作ったりということも検討されていますか。

【北村会長】

グッズの問題やカフェの問題というのは、とても重要な問題だと思います。単に収益の問題ということだけではなくて、気軽に立ち寄ること、作品を見なくても、カフェを利用する、グッズを買うということは、とても重要なファクターだと思っていて、私たちも基本構想の中に入れていきます。

【藤島委員】

そこは、弱いかなと思います。

【菅野副館長】

近代美術館の現状としては、美術館協力会さんの御協力による売店があるのと、特別展があるときには、特別コーナーということで、実行委員会で販売を行っている

ます。いずれにしても、いろいろな方に来ていただき、興味を持っていただいて、お帰りのときには、展覧会で満足するのは当然ですけども、それ以外の面でも御満足いただけるようにということは、リニューアルに当たっての大きな検討要素になっています。

【木村委員】

工事は、いつくらいから始まるのでしょうか。

【浅野道立近代美術館担当課長】

今年度、基本計画の検討と合わせて、民間活力を導入できるかどうかという調査を実施しているのですが、これを導入できるのかどうかで、今後のスケジュールが変わってきます。それがあるので、なかなか今の時点で明確にするのが難しいのですが、早ければ来年度から、基本的な設計、また、民間活力を導入するのであれば、民間活力を導入するための基礎的な調査をスタートし、令和9年度（2027年度）も、引き続き、そのようなことを進めていくというところくらいまでは想定されています。

着工は、多分、その後になるだろうと考えられています。民間活力を導入する、導入しないで相当スケジュールが変わってきますが、今、ちょうどその可能性を調査しているところです。

【北村会長】

P F I については、今年度中に結論がほぼ出るということですよ。

【浅野道立近代美術館担当課長】

何らかの方向性が出るだろうと思います。

【北村会長】

多分、道民の皆さんも、私たちも、いつできるんだというのが一番の関心事だと思うのですが、この議論に頂上があるとすると、一体、今は何合目まで来ているのかというのが、なかなか分からないので、モヤモヤする部分が残るのだろうと思います。

私の印象としては、基本構想が出て、ベースキャンプができて5合目くらいまで来たので、そこからまた登り始めて、P F I が決まれば6合目、基本的な設計が終われば、7合目、8合目まで行くのかなという感じです。

【木村委員】

リニューアルに関して、本当に素晴らしい提言がたくさんあるのですが、例えば、今は、美術館の中のレストランとカフェが十分機能していないようなところもありますので、そのようなところも含めて、皆さんの声をすくい取って進めていただきたいと思います。

【北村会長】

いろいろなチャンネルで声を聞く機会があると思いますし、先ほど申し上げたように、御意見をいただければ、それは大きな声になると思います。どのように、あるべき形を実現するのかということは、一生懸命検討したいと思います。

【木村委員】

入口へのアプローチのところは、ロードヒーティングになっているのでしょうか。

【熊澤総務企画部長】

現状は、ロードヒーティングになっていないです。積雪寒冷地ですので、リニューアルの中で、ぜひ実現してほしいと思っています。

【木村委員】

そうですね。ランニングコストはかかると思うんですけども、いつも雪が積もっているような状態でお客様を迎えるのは、いかななものかなという感じがします。あと、苦言になってしまいますが、アプローチのところにある池が、いつも綺麗な状態ではないので、メンテナンスについて、どうにかならないのかということも感じます。

建設当初は、希望的な観測で、こうなったらとても良くなるという感じだったのだと思うのですが、実際、年月が経つと、周りの景観も変わってきます。樹木にしてもそうですね。やはり、経費はかかりますが、後々のこともきちんとしていかなければならない問題かなと思うところはあります。

【菅野副館長】

お話いただいたように、建設当時は、いろいろなコンセプトがあって、池なども整備したのですが、実際には、バリアフリーもそうですが、今の時代になかなか追いついていない部分もありますので、今後、検討の材料としていきたいと思います。

【三橋委員】

私も、東京で、館を運営しながら、次のグランドオープンに向けて、両方の業務をしていた経験があるのですが、通常の業務にプラスアルファで、ものすごい量の業務があり、本当にバタバタと人が倒れていったりしたことを思い出しました。

やらなければならないことは、たくさんあると思いますし、効率的に進めるとは思います。ただ、業務が倍になるまではいかないのかもしれませんが、職員の皆さんにも、かなりの負担がかかると思います。

やった方がよいことがたくさんあるのは、本当にそうなのですが、職員が倒れてしまっただけではないということも大事なことでと思います。自分の経験として、施設担当の課長が、トイレで倒れてそのまま亡くなったこともありましたが、本当

に何人倒れただろうというくらいで、気が付くと夜中の3時までといったことも多かったです。

時代が違い、今は、働き方改革もあるので大丈夫とは思いますが、かなり気を付けていかないと、負担が増えていくばかりかと思います。きっと、誰も外から言ってくれないと思いますので、そこだけ、経験談としてお話ししました。

皆さん、頑張ってくださいだと思います。

【北村会長】

ぜひ、ワークライフバランスには、気を付けていただきたいと思います。

【菅野副館長】

貴重な御意見、ありがとうございます。今は、館の運営をしながら、新しい姿も検討している状況にありますが、今後、新しい機能が必要ということもあり、それに合わせて、専門性、また、体制や人数の面を充実させていくことの重要性も感じていますので、そのようなことも踏まえて検討していきたいと思います。

【吉崎副会長】

かなり難しいということを重々承知の上で、意見を言わせていただきたいと思います。昔から、何度も話が出ては流れていることですが、近代美術館と知事公館の間の道のことです。もし、ここを自由に往来できるようになれば、一つの文化ゾーン、緑地ゾーンとして、単に美術館に来て終わりということではなく、ゆっくりしていく空間に、例えば、そこに民間の素敵なカフェができるといったように、より可能性を持った、生き生きとしたゾーンになるのではないかという勝手なイメージを持っています。

特に、美術館としても屋外展開できるということ、ワークショップや展示ができるエリアが広がっていく、フリースペースができるというのは、とても魅力的だと思います。住民の方々に意見を聞いたら反対があったということも聞いていて、難しいと思いつつも、その夢というのは、何とか実現できる道も探していただければありがたいと思います。難しいとは思いつつも、意見として述べさせていただきます。

【北村会長】

そのような議論が、ないわけではないです。特に、知事公館エリアと近代美術館をどのように一体化して整備するのかというのは、とても重要な議論のポイントで、究極的には、その道路をなくして、つなげるというものないわけではないということです。

ただ、地元の方の生活道路になっていて、美術館だけの問題ではなくて、札幌市のまちづくりの問題になってしまうということもあって、夢はあるのですが、なか

なか難しいというところです。

【菅野副館長】

札幌市にもお伝えはしてはいるのですが、生活道路でもありますし、病院への緊急搬送にも使われているということです。

【北村会長】

知事公館エリアと近代美術館の整備を一体化して進めるというのは、一つの方針としてありますし、知事公館だけではなく、三岸好太郎美術館とどうつなげるのかということも、あるのかなと思います。

【菅野副館長】

今後も、検討会議の開催ごとに情報をお知らせするようにしますので、資料等を見ていただいて、また御意見があれば、御連絡いただければと思います。

(3) 三岸好太郎美術館

ア 令和6年度事業実施報告及び美術館評価について

イ 令和7年度運営計画について

(ア) 事務局から資料3-1及び資料3-2について説明

(イ) 質疑・意見

【大石委員】

先ほどお話のあった敷居の低い美術館とは、少し言葉が違うのかもしれませんが、皆さんに愛される美術館を目指して、自発的にいろいろな企画をするなど、非常に積極的に活動されていて、このことが、来館者数を高い水準に維持できている要因なのかなと思いました。「みまのめ」も10回を過ぎ、非常に充実していて、更に高まっていく予感がしますので、ぜひ継続して活動していただければと思います。

特に気になったというか、一番良いと思うのが展覧会名で、「永遠のオマージュ」もそうですが、「匂ふやうな灰色」や「ふたりの『悪童』」といったネーミングセンスが、引き付ける魅力になっていると思いますので、ぜひ、継続的に少し際どいところを攻めていただけると、興味・関心が高まっていくのではないかと思います。

【中井委員】

いつも、いろいろとしていただいて、ありがたいと思っています。「たんけん美術館」などの企画で、子供向けのクイズを考えられているのですが、毎回、ちゃんと観ようというきっかけを作るようなクイズを新しく作っていて、学芸員さんにとってもセンスがあるなと思っていました。

ただ、今日も、こちらに来る前に寄ってきたのですが、まだ夏休みのお子さんがあまりいらっしゃっていないと聞いたので、これから増えると良いなと思っています。

【霜村委員】

いつもながら展示も多彩ですし、何より普及事業ですね。三岸好太郎の絵が、札幌の街に密着しているだけに、まち歩きツアーで、街並みと作品、その時代を感じられるということで、学芸員さんが積極的に外に出て実施しているというところが、評価が高いのかなと思います。私も、いつも参加したいと思いながら、参加できていないのですが、本当にいつか参加したいと思っています。

それから、面積の小さな美術館ですが、リサイクルもあり、ショップもあり、また、毎回、ボランティアさんが、とても積極的に「解説はいかがですか。」とお声掛けくださるんですね。そこが素晴らしいと思います。やはり、敷居の高さの一つに、どう観れば良いのかが分からないということがあるのだらうと思います。私

たち博物館に勤めている人間の中でも、美術館は違うという話があるのですが、なぜかというと、美術作品を観るには、教育がいる、知識がいると言われているということがあります。もちろん、見方を一つに限定してしまうのは良くないのですが、何か、糸口やきっかけがあると、その世界に入っていけるということがあると思いますので、ボランティアさんが、とてもお声掛けが上手で、すごく丁寧に寄り添って、必要とされる方には、ずっと付き合ってくださいるところが素晴らしいと思いますし、そこが、何度も行きたくなる美術館の魅力の一つかなと感じています。

【吉崎副会長】

令和6年度（2024年度）ですが、15点の作品寄贈というのは、最近はなかったことだと思いますし、40年ぶりの作品集発行など、形に残る活動があった年だったと思います。それから、評価において、「多様な主体との連携・協力による地域の活力向上」が、近代美術館も含めて唯一のA評価ということで、すごく目立っています。僕の勤めている本郷新記念札幌彫刻美術館もそうなのですが、小さな美術館だからこそ、自分の美術館の力だけではなく、外の力をいかに借りて、より良い活動をしていくかということが重要だと思うので、これからも、その幅と関わりの深さを強めながら、展開していただければと思います。

また、今年の「アーモンドの瞳の女」を観に行ったのですが、僕も初めて見るような素描がたくさんあって、「こんな作品、まだ持っていたんだ。」と思いました。

テーマの設定の仕方、今まで展示機会が少なかった作品も、ちゃんと生かした展示ができると改めて思いましたので、ぜひ、これからも、しっかりとコレクションを生かした展示をしていただきたいです。

あと、鈴木ヒラクさんの展示も楽しみにしています。

【藤島委員】

私は、まだ過去に1回しか行ったことなく、最近も行っていなかったのですが、見方の切り取り方というのが斬新で、これは面白いと思いました。クイズではないですけど、こういう問い掛けというのが大事なのかなと思いました。

【北村会長】

お隣の美術館ですが、木村委員は、いかがでしょうか。

【木村委員】

今日、午前中に寄ってこようかなと思ったのですが、ちょっと時間がなくて、行けませんでしたので、また改めて行こうと思います。

【本吉三岸好太郎美術館副館長】

改めて、美術館協力会の皆さんには、いつも本当にお世話になっています。これからもよろしくお願いいたします。

【北村会長】

先ほど、特別展を観たら体力がなくて、常設展まで行けないという話がありましたが、近美と三岸は、同じ組織の中の美術館ですので、近美から三岸に行ったり、三岸から近美に来たりという流れができると良いと思います。三岸だと、サテライトということで北菓楼でも展示していて、それがどれだけ呼び水になっているかは分からないのですが、例えば、近美にも三岸の作品が1点あって、「三岸で観られますよ。」というような形で、お互いに、もう少し結び付きがあっても良いのかなという気がします。

【千葉委員】

今回、嬉しかったのが、マール記念日ということで、12月20日にコンサートがありますので、私も個人で参加したいと思っています。

【北村会長】

近美の資料にも記載がありましたが、調査研究については、個人負担になっているのでしょうか。

【本吉三岸好太郎美術館副館長】

例えば、文化庁で開催するものであっても、旅費が措置されていないので、なかなか行けないといったことがあります。せめて、地元で作家を発見したり、調査研究したりというところくらいは、公務で行ってもらえるようにと頑張ってはいるのですが、なかなか難しいところです。

【北村会長】

近美もそうですが、予算を措置してもらわないと、美術館活動そのものが停滞してしまうような気がします。

いろいろと課題があると思うのですが、三岸の方は、割とコアなファンの方が、一定数いると思います。ただ、先ほども言ったように、どのようにして新しいファンを開拓していくのかということが、これからの課題なのかなと思います。そのためには、どのような手法があるのかを、広報の在り方も含めて、工夫していただければと思います。

では、以上をもちまして、本日の議事をすべて終了します。

熱心な御討議、御意見ありがとうございます。

【議事終了】

事務局から、次回協議会の日程等の事務連絡を行い、すべての議事を終了。